

第5章 考 察

第1節 下小松古墳群の年代と性格

1. 出土土器群の様相

下小松古墳群の築造年代については、従来それが古墳であるか否かの議論を経過するなかで、小森山支群第61号墳の発掘調査がなされ、前方後円墳の墳丘くびれ部から土師器が出土したことでその議論に終止符を打つこととなった。

川西町教育委員会による発掘調査の結果からみると、小森山支群第61号墳のほかと同支群第65号墳にも土器の出土があり、また鷹待場支群第106号墳、第186号墳にも土器の出土がある。明治大学による調査では、小森山支群第40号墳、第98号墳においても土器をえているから、それらを検討することで下小松古墳群全体についての年代観を示すことが可能かと思われる。とは言うものの、当該地域における土師器の編年体系が確立しているとは言い難い現状では、同地の隣接地域の間接資料との対比によって、その編年的位置を考慮しなければならないという制約もある。

出土土器の検討結果からすると、下小松古墳群出土の土器には、大別して二群の土師器と若干の須恵器が知られる。土師器は、底部穿孔壺形土器を中心とする一群と、甕形、椀形、坏形土器を中心とする一群とに分けることができ、その分類はまた出土古墳による区分にも通じていることに注目しておきたい。すなわち、底部穿孔壺形土器を出す第106号墳、第186号墳（いずれも鷹待場支群）と、第40号墳、第61号墳、第65号墳、第98号墳（いずれも小森山支群）の甕形土器などを出す群との相違として捉えられる。さらに加えてみると、薬師沢支群における二古墳の調査では、土師器をはじめとする土器の出土をみていないことにも注意しておく必要があるだろう。

第106号墳、第186号墳出土の底部穿孔壺形土器は、いずれも墳丘封土中から出土したものであり、口縁部から頸部にかけての破片の観察結果からすると、やや外反しながら直立する傾向をみせている。東北地方の土師器群の中では、やや古式の様相を呈するが、置賜盆地では対比すべき資料が乏しい。天神森古墳出土資料に後続するものかも知れない。5世紀前半の年代（宮町式期か）を与えておこう。

第40号墳、第61号墳、第65号墳、第98号墳出土の土器には、甕形土器、坏形土器、椀形

土器などがみられ、第40号墳出土器の坏形土器、第61号墳出土の椀形土器などは器形の特徴をよく捉えることができる。甕形土器の口縁部がやや直立する傾向や、椀形土器の口縁部が直立する傾向からみると第61号墳は谷柏期に、第40号墳、第65号墳、第98号墳出土器はそれよりもやや後出の傾向がみられるであろう。ことに、第98号墳の内部主体直上の埋土中から出土した須恵器は、TK10あるいはTK45型式に併行すると考えられるから、置賜盆地の三軒屋式期に比定できると考えられる。

2. 副葬品にみる様相

いままでの調査によって得られた各古墳の副葬品はきわめて少ない。

第40号墳の大刀（東棺）と刀子（西棺）、第61号墳の大刀、鉄鏃、耳環、第64号墳の刀子、第77号墳の刀子、第98号墳の鞍と鉄鏃片、第143号墳からの剣、鉄鏃、刀子、鋤先、竹櫛、鋸齒文鏡などが主たるものである。この中で年代を検討しうる内容をもつものは、第143号墳出土の鉄鏃一括が相当する。長頸片刃鏃で、詳細に検討してみると鏃身刃部が直線的なものと、やや「ふくら」のあるものとの二者があることがわかる。長頸鏃の全盛時期の産物であるといえよう。また、伴出する短茎腸袂三角鏃や鏃身に透孔をもつ同様式鏃は長頸片刃鏃より年代的に先行する傾向をみせるし、やや小形の短茎三角鏃も、年代的にみると短茎腸袂三角鏃と近接した年代、つまり5世紀代後半に位置付けられ、長頸片刃鏃の盛行年代、すなわち6世紀前半との連続した時代推移を読みとることができる。

第61号墳出土の短茎、長頸腸袂三角鏃についても広根化の進んだ段階のものと考えてよく5世紀代後半以降の年代を考えおいた方がよいだろう。

第143号墳出土の鋤先、竹櫛についての年代的な検討は今後の課題となろう。また比較的出土例の多い刀子についても今後の検討材料としておきたい。

3. 内部主体の構造について

下小松古墳群で、いままでの発掘調査例で判明している内部主体構造には二者がある。すなわち第40号墳、第98号墳発見の大形な土壙を伴う木棺墓と、第61号墳、第64号墳、第143号墳などの比較的小規模な土壙を持つ木棺墓（木棺直葬墓）とである。

さらに詳細に観察してみると木棺には割竹形木棺のもの（第40号・第61号・第64号・第143号墳）と箱形木棺と推定される第98号墳のものとの二者に分けることもできる。これは主

として土壙棺床の状況による判断であり、木棺自体の遺存例はないから断定はできない。

土壙の掘り方に大きな差があることはすでに述べた。ことに第40号墳における2基の土壙は内蔵する木棺の規模に比して過大であると思われ、土壙内覆土の状況や東側主体部での覆土中での土器の出土状況をみると、最初に土壙を埋めた後、木棺腐朽にともなう墳頂部埋土の陥没とそれの修復のための二次的な埋土とが推定されて興味深い。二次的な墳頂部への埋土行為を必要とする背景は、土壙内部の木棺と土壙上面との間に大きな間隙があったことを推定させる現象であり、この点からみると土壙上部は木質の天井が架けられ、木棺との間にかなりの空隙があったとみるべきで、簡略化した木槨を想定してもよいであろう。

この観点に立って第98号墳の内部主体をみるとさらにその感を強くする。すなわち、第98号墳の内部主体は、大規模な墓壙をもつ箱形木棺ではないかと推定しておいた。さらにつけ加えるならば、土壙内にみられた炭化した木板の遺存である。炭化木板はあらかじめ表面を炭化させた板材を用いたと推定している。土壙内では部分的にのみ検出された状態だから、土壙の壁全体にめぐらされていたとは考え難いが、土壙内で土壙の上半部をめぐらせていた可能性は強い。さらに、土壙内の覆土の状況は、さきの第40号墳の場合と同様に二次的な墳頂部埋土の痕跡があり、覆土中の土器出土状況も第40号墳東側主体部と共通する内容をもつことから、土壙上面に木材による天井を架け、木棺との間にかなりの空隙間のあったことを推定しうる。木槨と呼ぶにふさわしい形態を示していたのではないだろうか。

いずれにしても東北地方南部における5～6世紀段階で、このような内部主体を採用しているとすれば、全国的な視野の中で歴史的な性格を検討しなければならないと考える。単に石材の産出があるか否かといった単純な問題ではなく、古墳群の性格を考えるうえでかなり重要な鍵となるものと思われる。

下小松古墳群での発掘調査例はまだ少ないが、いままでの調査例の中で前方後円墳3基の調査例がある。そのうち第40号墳、第61号墳の後円部に複数埋葬がみられた。第98号墳の場合も発見された主体部が後円部墳頂の中心部より大きく南にはずれて構築されているところからみると、複数埋葬の計画的な内容が含まれていたのかも知れない。他の調査例は円墳あるいは方墳(?)例で、それらはいずれも単数埋葬例であった。前方後円墳における複数埋葬の例は、4世紀末頃に画期として出現してくる。横穴式石室の導入によって一

般的には、一墳複葬主体構築の習は終りを告げると考えているが、5～6世紀代にかけて、ことに前方後円墳のみにそれがみられるところにも、下小松古墳群の特徴があらわれているものと思われる。このことは、前方後円墳が集中的にみられる小森山支群こそが下小松古墳群全体の最盛期のものと推定され、鷹待場支群が下小松古墳群の中ではやや先行して築造が開始されたであろうことを指摘しておきたい。